



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

「村の日記」の読み解き方：記録されなかったことを問う

著者	鎌谷 かおる, 郡山 志保, 高橋 大樹, 古川 彰
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	133
ページ	13-29
発行年	2020-03-12
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028546

「村の日記」の読み解き方－記録されなかったことを問う*

鎌 谷 か お る**
郡 山 志 保***
高 橋 大 樹****
古 川 彰*****

はじめに (古川彰)

1) 知内村「記録」のこと：

滋賀県湖西北部に知内村（現在は高島市マキノ町知内〔図1〕参照）がある。知内の近代までの文書が収められた「帳蔵」の中に、約270年以上も書き継がれてきた「記録」と題された十数冊の簿冊が残されている。その「記録」の1冊目は延享2年（1745）の内容からはじまる。「記録」は庄屋、戸長、惣代、区長、時に代役としての書役などによって、その後も延々と現在に至るまで書き続けられている。

この「記録」は、米山俊直『日本のむらの百年』（日本放送出版協会、1967年）のなかに「むらの記録」として初めて紹介された。面白いことに、この米山の著作の記述が、「記録」のなかにメモとして残されている。メモは、安政6年

（1859）からはじまる2冊目の「記録」の冒頭に綴じ込まれている¹⁾。

メモを書いて「記録」に挟み込んだのは、知内在住の中川太重氏である（以下、当時古川が呼んでいたように、「太重さん」と記す）。太重さんは、鳥越皓之を代表とする「環境史研究会」²⁾のメンバーが知内で調査をはじめた頃から多くの話を聞かせて頂くとともに、共同調査者でもあった³⁾。すでに「記録」の一部となったメモを「記録」の性格がここからも垣間見えるので、長くなるが引用しておこう。

記録補修について（昭和五十三年八月中川太重誌す）

昭和五十三年八月、安養寺境内にある唐崎奥の院と伝へられる観音堂のお祭りが近年淋しくなつてゐるため、これらの復興をめざして知内老人クラブ有志相寄り、観音堂の古事

*キーワード：村の日記、区有文書、史料調査

**立命館大学食マネジメント学部准教授

***京都外国語大学非常勤講師

****大津市歴史博物館学芸員

*****関西学院大学社会学部教授

1) 2冊目の「記録」の本文は次のように始まる。

「此記録帳之儀古帳甚大帳ニ相成候ニ付、当安政六己未年相改、新帳相認メ申候、古キ事者古帳を以相調可申候事」（これまでの帳面が膨大になり安政6年に新しい帳面に改めたので、これより前のことは古い帳面を調べるようにしてください。）なお、米山はこの「記録」を1冊目と当時認識していた。

2) 滋賀県琵琶湖研究所の研究員であった嘉田由紀子から古川が、琵琶湖の汚染問題を村の生活レベルから検討して欲しいとの委託をうけ、鳥越皓之に代表をお願いし、当時大学院生であった桜井厚、大槻恵美、松田素二、伊藤康宏、古川彰らがメンバーとして研究会を組織し、1982年から調査を開始した。

3) 私たちが知内を「湖畔集落研究会」のフィールドに決めたのは、嘉田、古川、松田らが学部時代にフィールドワークの手ほどきをうけた米山氏の著書にでてくる「知内」と「むらの記録」に魅力を感じていたということも理由だったかもしれない。

それぞれの時期の書く人の個性を反映して非常にくわしい部分とそうでない部分がある。字もときにはすばらしい達筆であつたり 乱暴な金釘流だつたりする。しかしともかくこの一三冊を読み通せばむらに起つたさまざまな出来事がかなりの程度までうかがうことができるように思われた。

わたくしの冬の再訪はこの一組の記録をもう一度くわしく読んでみたいと考えたためであった。

以下有略（昭和四二年十二月二十五日発行）

（引用に際し、適宜句読点を付している）

米山の語りの含意は、まもなく明治百年を迎えようとしている村もまた、明治に入るまでの長い歴史のうえに成り立っていることを押さえた上で「日本の村の百年」を考えようということだろう。

その文章を太重さんがそのまま写して「記録」に挟んで残そうとされた意図はどこにあったのだろうか。自分たちの村がひっそりと書き綴ってきた文書（「記録」）が、「むらの記録」として米山によって発見され著書の中に記されたのを見出して、太重さんもまたその文書を村にとってだけではない普遍的な価値を持つモノとして再・発見した。その驚きと喜びを残そうとされたのかもしれない。

太重さんが帳蔵から出してくださった「むらの記録」と出会った1982年の夏は、私たちの「記録」との長い付き合いの始まりだった。

2) 「記録」の翻刻：「むらの記録」から「村の日記」へ

「湖畔集落研究会」の調査でも、この「記録」からメンバーたちは多くのことを学ぶことができた。1745年から1982年の当時までの200年以上もの村の出来事や時々書き手の感想までも書かれている史料に出会えることなど、希有の事例といつてよい。

「湖畔集落研究会」のメンバーは報告書数冊と著書を2冊出したあと⁴⁾、それぞれのフィールド調査に入っていき、嘉田と古川だけが知内での調査を続けていた。1986年に古川が太重さんと「記録」について話している中で、太重さんが「記録」の翻刻をしはじめていたがなかなか進まないというような話から、どれくらい時間がかかるかわからないけれど「記録」の全文を翻刻しましょう、という約束ができてしまった。

そこから、伊藤がおもに解説し、古川がそれを入力しチェックした原稿を、古川と太重さんとで検討する「記録」とのながい付き合いがはじまることになった。活字化するにあたって太重さんと議論したのは、「記録」をそのまま「記録」、もしくは知内村「記録」という史料名で掲載するか、それとも史料の性格を表すような呼び名をつけるかについてだった。議論のなかで、「むらが付けていた日記みたいなもの」という太重さんの言葉を拾って、「江州知内村『記録』-村の日記-」というタイトルが決まった。

1745年からはじめて1944年まで、最初は伊藤康宏と『中京大学社会学部紀要』に、途中とばしていた箇所については、鎌谷と『関西学院大学社会学部紀要』に掲載し、2005年に1944年までのすべての翻刻を終えた。それらに修正を加え『村の日記1745-1948』として私家版のかたちで出版したのは、米山氏の「むらの記録」の「発見」から50年、最初の翻刻活字化から20年たった2008年だった。

3) 知内村「記録」と「村の日記」

本稿の共著者である鎌谷は2004年から古川とともに「村の日記」研究会という名で知内村「記録」を読みデータベース化する作業を開始しており、それが前述の『村の日記1745-1948』原稿のベースになっている⁵⁾。

鎌谷、郡山、高橋に柿本雅美を加えた4名は、「村の日記」研究会を継続するとともに、2009年には知内で一軒家を借りて、そこを「知内研究

4) 『水と人の環境史』（鳥越皓之編、御茶の水書房、1984年）、『環境問題の社会理論』（鳥越皓之・嘉田由紀子編、御茶の水書房、1989年）

5) 「村の日記」研究会は関西学院大学社会学部が中心となった21世紀COEプログラム（『『人類の幸福に資する社会調査』の研究』2003-2008）の研究プロジェクトの1つであった。

所」という研究拠点にして知内調査とともに、知内の人びとと「村の日記」を読む会や子どもたちと古い漁具を使つての魚採りの会を開くなど、地域の人びととの協働調査を継続している⁶⁾。

鎌谷、郡山は近世史、高橋は中・近世史を専門分野としていることもあって、書かれた史料の分析がおもな研究方法であったが、「村の日記」研究会、「知内研究所」の活動で、フィールドに深く入り、聞き取りと言わずとも地域の人びととの会話や協働調査を続けるうちに、書かれた史料の読み方に少しずつ変化が出てきたという。もちろん史料に当時の生活ぶりを重ねて読み解くのはおかしいことではないし、当然のことと言ってもよいのだが、史料の余白、行間への洞察力、想像力が増してきた。しかし史料批判についての歴史学の薫陶は強い研究規範として働くので、易々と史料を乗り越えてしまうことにはつよい抑止力が働くことになる。古川が気楽にいい加減な史料批判で勝手なことを書いているのを、横目にみながら、自らの研究倫理に従うしかない。

しかしこの10年ほどの研究会の積み重ねの中で、史料批判はそれとしてありながらも、史料にいままでとは異なる視点を注いでいること、面白いアイデアを史料から思いつくことも多くなったように思う。それと同時に、古川のゆるい史料の読みが気になることも多くなった。そのひとつが、知内村「記録」を「村の日記」と言ってしまうことへの躊躇である。村で起こった出来事ももちろん書かれているし、表現がいかにも日記風の箇所も多いけれど、差し出し文書の写し、「触」の写しなどもみられる。

本当に「村」の「日記」といいののだろうかという疑問は残るが、それを解き明かすため、本稿では、知内村「記録」の史料としての性格についていくつかの視点から検討を加えてみる。その際、「記録」に「記されたこと」の背後にある無数の「記されなかったこと」を意識しながら、具体的な事例を通して検討し、「むらの記録」の意味を考えることを試みている。

1. 「記録」に記すことの意味を考える： 大川から知内川へ（鎌谷かおる）

文献から過去の出来事の復元を試みる歴史学という学問において、文献に記されたことがまずは重要であることは言うまでもない。しかし、それと同時に、その「行間を読む」ことに努力が必要であることも確かである。様々な史料を照らし合わせつつ、あるいは寄せ集めながら、実態に迫る作業の中で、文字に表されていないことを「行間」から汲み取る作業は、簡単なことではないが、長く史料と向き合う中で、歴史研究者はそれを経験的にこなしているように思う。

では、それならば、もともと「記さなかったこと」について、私たちは、自覚的に目を向けてきたといえるだろうか。『環境と歴史学 歴史研究の新地平』（勉誠出版 2010）の中で、編者でアジア史を専門とする水島司氏は、歴史研究と文献史料との関係について、「多くの歴史研究者の卵は、語学をはじめとする文献解読のための訓練を受け、文献を読み重ねることによって歴史的な勘を養うことに多くの時間をかける」と特徴づけ、「対象と関わろうとする際のこのような歴史研究が身につけてきた禁欲さは、しかし、文献とはならなかった事象、その時代の人々が敢えて書き記そうとしなかった事象、あるいは文字に無縁だった人々が深く関わった事象に迫ろうとしたとき、足枷にしか過ぎなくなる」と、述べている。その指摘をどのように受け止めるべきであろうか。

本章では、川の名前の記され方を事例に「記録」に記されなかった事柄を分析することを通じて、記録に記すことの意味をあえて考えてみたいと思う。

1) 川の名前の記され方

知内には、昔から村を流れる複数の川がある。近世から現代に移り変わり、数度の河川改修を経て、その流れは変化しつつも、今につながっている。記録には、それらの川の名前が幾度となく登

6) 「村の日記」研究会がどのように展開してきたのか、地域での学びを続けてきたのかについては『暮らしと歴史の学び方－知内「村の日記」からの出発－』（「村の日記」研究会編、関西学院大学社会学部古川研究室、2010年）に詳しい。

場する。なかでも、大川・百瀬川・知内川の川の名前の登場が多い。しかし、「大川」という正式な名称の川は、現在この地域において存在はしていない。では、「大川」というのは、いったいどの川のことを指すのだろうか。([図2] 参照)

知内では、毎年4月末になると、知内川の下流で築の仕掛けが作られる。丸一日かけて仕掛けが完成する築は7月末まで設置され、毎日多く魚がそれに引っかかる。この築の歴史は古い。知内がかつて、知内村と呼ばれていた近世期には、その姿を知ることができる。知内区有文書には、知内村が川を挟んで対岸の西浜村との間で設置をした築をめぐる近世から近代にかけて度々争論を起こしたことが記された史料やそれを示す絵図が残されている。例えば、享保14年(1729)から文政2年(1819)にかけての築漁をめぐる争論の裁判記録が記された史料の表紙を見てみると、「大川一件裁許請書」とある。そのほか、両村の築をめぐる争論史料を見てみると、いずれもその川の名前は、「大川」とあり、それらのことから、史料上に登場する「大川」とは現在の知内川のことだということが判明する。では、いつの段階で、「大川」は「知内川」になったのだろうか。

知内区有文書の中で、築漁に関する史料を調べてみると、興味深い事実が読み取れる。知内川が

「大川」から「知内川」になるまでの経緯についてである。

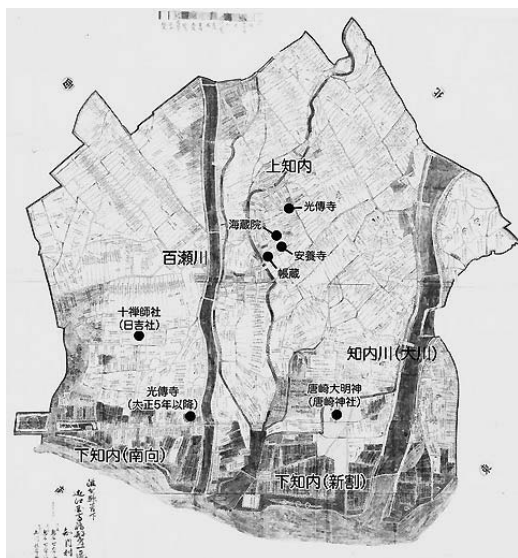
近世期の史料では、「大川」と記されていた知内川が、初めて「知内川」として登場するのは、明治6年のことである。この年の4月、築漁の漁業権確保のために村から県に当てて提出された嘆願書の題名には、「知内川築漁之儀ニ付奉歎願候」と記されている。しかし、同年12月に同所に宛てて提出された書類には「字大川漁義御上納御伺書」や「字知内川漁義御願書」等もあり、ここから同8年にかけては、「知内川」と「字大川」という名前が混在していくこととなる。明治7年の漁業権落札時においても川の名前は、「大川」である。それが知内川に一本化していくのは、管見の限り明治9年以降のことと思われる。

2) 「記録」に書き記すこと、しないこと

では、「記録」では川の名前はどのように記されているのであろうか。近世期の「記録」には、大川の記事を多くみることができる。例えば、天保5年(1834)には「大川筋下丸欠崩廿貳間之所願上御役所一統御見分御出被成候」と記されており、知内川の堤防が決壊した際に、領主である郡山藩の役人が見分に来たことがわかる。このように、知内川は、近世を通じて「大川」という名前で記されており、当時の村人たちにとって、知内川は「大川」だったということがわかる。ちなみに、「大川」という言葉には、川の本流や、村を流れる川のうちで大きな川のことを指す呼び名という意味がある。したがって、知内川が村を流れる大きな川という意味合いで「大川」と呼ばれるようになったことは想像に難くない。しかし、重要なのはそのことではなく、正式名称がいつ変わったかということ／それを地域の人々がいつ認識したのかということではないだろうか。「記録」には大川が知内川と呼ばれるようになった経緯や理由が記されているのであろうか。

明治14年の「記録」に、以下の記述がある。

此記録簿ハ皇国一般一大変革ノ御変事ニ際シ、村内依旧仕来り候格合モ相異シ種々紛紜トシ、又旧記録帳面モ紙数相嵩ミ候間、簿ヲ新タニ別スル所也、



[図2] 知内村地籍図(明治6年(1873)) (知内区所蔵) 川などの主要箇所について加筆した。

近世から近代に入り、旧来からの仕来りが変化する中で、記録帳面を新しいものに変えたのである。そして、この記述の後には、明治5年に知内村から犬上県海津出張所宛てに提出された村明細が書き写されており、旧領主・耕地面積・地価・戸数・人口の詳細が読み取れる。さらに記述は続き、村の概要に関する一つ書きが並ぶ。続いて、梁漁争論のことも記されており、「知内川漁稼之義」という文言で書き始められている。さらに続く記述の中で、村の川についての記述がある。そこには、「知内川」「字百瀬川」「馬糞川」「字殿田川」「前川」「スタ川」「本ノ川」「字人通川」の名前が見える。「記録」の明治6年から同8年の記述を見てみても、大川から知内川への名前変更に関する話題は登場することはなく、ついに、「大川」の名前は、「記録」から静かに姿を消してしまったのである。

3) あえて書かれていないことを読み取ること

さて、大川が知内川へと名称を変化した理由を、村の外側の状況との関係において、考えてみよう。「記録」が連綿と書き綴られてきた間、知内はさまざまな外側からの変化を経験してきた。知内が知内村という一つの行政村として成り立った近世期には、いくつかの領主変遷を経てその後、郡山藩の領地となり、明治維新を迎えた。では、近世から近代への移り変わりは、知内にどのような変化をもたらしたのだろうか。それを語る前に、一つ述べておきたいことがある。私たちは、これまでの調査の中で、非常に多くの文書・古記録を実見する経験をしてきた。その経験から、たとえ年代が書かれていなくても、書式や料紙、形、などから近代文書だと判断することができるという事実がある。言うまでもなく、明治維新以後、明治政府は、版籍奉還・廃藩置県・地租改正等、国家・社会を刷新するためのさまざまな政策に取り組んだ。これを受けて、日本各地では、村人の把握のされ方、税金の収め方、行政区分のかたち等、いろいろなものが変化していくことになる。私たちは、この時期（明治4年から6年）の古文書を見ながら、書式の変化をまず感じ、そこから新しい時代／近代が地域内に浸透したことを「読み取る」のである。当時の人々が、

戸惑いながら新しい文書を作り、慣れない計算をし、書き慣れない文章を作った姿を文書の中に見るのである。

大川が知内川への名称を変更した時期は、まさにその頃である。村の中を通る大きな川であった大川は、新しい行政下のもと、誰もが把握できる固有名詞となる必要があったのだ。

しかし、私が知りたいのは、表向きの名称の発生と、それが地域内でどのように浸透していくのか、という点である。「大川」の名は、知内でいつまで使用されていたのか、「大川」の名をいつから使用しなくなったのか。そして、いつから使用しないと、決めたのだろうか。

近世から近代への変化は、地域の何を喪失させ、何をもたらしたのか。「大川」の呼び名の変化を考える先に、そうした大きな問いが見えてくる。

4) 小 括

本章では、「記録」に記されなかったことの分析を通じて、記録に記すことの意味を考えるために、知内川の名称を事例に検討した。

川の名前が行政的に切り替わることを、地域側ではどのように受け止めたのだろうか。「記録」がそれを語ってくれることはなかった。

長い年月の中で、自然に変化するものもあれば、外からの変化で突然に姿を変えるものもある。それを、地域がどのように受け止め、受け入れ、変化したのだろうか。私たちは、それを「記録」からどのように読み取れば良いのだろうか。書かれていないことから、類推することの難しさを感じつつも、まだまだ読み落としている「行間」を読み解く作業を怠っているのでは、と改めて自身に問い直してみるのである。

2. 「記録」に記された触・記されなかった触（郡山志保）

知内村「記録」には領主から廻達される触の記述（触に関連する記述）がしばしばみられる。まず触とは何か、説明しておきたい。触は「御触書」・「触書」と呼ばれる文書のことで、幕府や藩が作成し、領内に廻状として通達するものであ

る。現代では消費増税をはじめとする新しい法律はインターネットやテレビ・ラジオ・新聞などのメディアを通して、私たちは瞬時に情報を得ることができるが、近世は触を使って全国民に周知徹底させていた。

それでは、天和2年（1682）5月、五代将軍徳川綱吉の時代に発令された「生類憐みの令」を例にとって、法令が領主から領民へどのように周知されていたのかを見てみよう。「生類憐みの令」とは、生きもの、特に犬を大事にしようという法令の総称である。まず、江戸城で将軍の意向を受

け、老中・若年寄が法令を作成する。そして江戸城に各藩の代表者（留守居）を集め、法令が書かれた書類（触）を渡す⁷⁾。次に各藩の代表者が江戸藩邸にて触の文章に一筆添えて、国許へ飛脚を使って知らせる。触を受け取った国許（城もしくは陣屋）ではさらに担当者が一筆添えて領内の村々に触として廻すのである。

触が廻ってきた村では、内容を確認したことを証明するために、村役人である庄屋が触に押印し、布達された触を記録として保存するため、帳面に書き留め、次の村へ廻す。順々に廻っていつ

【表1】「記録」に記載のある触および触に関する記述

	年月	西暦	内容	備考	種類	文書番号
1	文化2年	1804	国役割賦高掛りにつき尋ねることがあれば村役人の内1人、16日9ツ時までに来るように通達		全国触	1-10
2	文化2年	1804	瀬田川土砂留御入用割賦につき村高を書き上げるよう通達	1803年触に関する問い合わせ	全国触	1-10
3	文化5年	1808	朝鮮通信使が対馬に近々来朝につき5ヶ年の間、1年につき村高100石につき永200文ずつ掛り金を納めるよう通達（村高100石につき金1両）	朝鮮通信使来聘につき高掛り	全国触	1-10
4	文化5年2月	1808	文化3年琉球人参府御帰国の道中人馬継立、そのほか諸入用につき高掛り100石につき銀16匁3分を来月29日までに京都御役所へ納めるよう通達		全国触	1-10
5	文化5年11月	1808	柳澤新五郎殿御家老職御免、御一族に／次の家老に豊原権左衛門様が就任		藩触	1-10
6	文化5年11月	1808	朝鮮通信使来聘につき京都御奉行様へ国役金持参		全国触	1-10
7	文化9年3月	1812	殿様が国許へ帰ることを許され、御馬御巻物を拝領	文化11年の記述	藩触	1-13
8	文化10年正月	1813	殿様に御男子誕生（名前は将八郎様）、男女でマサの字を使わないよう通達		藩触	1-13
9	文化12年2月	1815	代官園崎園平様お越しにつき、前日御役所様より触通達		藩触	1-13
10	文政4年5月	1821	関東筋川普請御用仰せつけられる（知内村は4貫587匁を負担→海津役所へ納める）		全国触	-
11	天保9年	1838	白髭大明神にて殿様御病氣御全快のお祈祷		藩触	-
12	天保9年6月	1838	殿様御病氣養生かなわずご逝去につき鳴物停止		藩触	-
13	天保15年	1844	郡山柳町八幡宮造営につき寄進		藩触	-
14	嘉永2年2月	1849	殿様家督相続		藩触	-
15	万延1年10月	1861	和宮関東御下向につき大津駅へ助郷仰せつけられる／志賀・高島・栗太郎、河内国村高100石につき金2両2歩宛持参するよう通達		全国触	-
16	慶応1年	1865	長州一件につき公方様大坂表へ御進発につき鳴物停止		全国触	-
17	慶応2年	1866	日光御法会につき村高書上げ／助郷人足		全国触	1-35

7) 藤井譲治『江戸時代のお触れ』（日本史リブレット85、山川出版社、2003年）。

た触は閲覧する最後の村の庄屋が、藩の役所などに触を持参して触の廻達は終了する。なお庄屋が触を書き写した帳面は「触留帳」・「御触書留帳」・「御用留」というさまざまな表題が付されて、現在も日本の各地に残存している。

知内区有文書の中にも、この触を記録した史料（「触留帳」）がいくつか残っている。当然、「触留帳」に触の内容が写されているため、「記録」には知内村に廻ってきた触の内容を書き記す必要はない。しかし、冒頭で述べたように、知内村「記録」を見ていくと、触の内容がいくつか散見されるのである。

そこで本章では知内村に廻ってきた触の中で、「触留帳」と「記録」の両方に記載のある触の有無、「記録」に記載された触・記載されなかった触を確認した上で、触が「記録」に記載された意味、触が「記録」に記載されなかった意味について検討する。この点を分析することで知内村「記録」とは何かを考えてみたい。

1) 「触留帳」と「記録」両方に記載された触

触には全国触と地域限定の触に分けることができる。全国触とは、先述した「生類憐みの令」な

どの法令や指名手配犯の人相書、大きなお寺や神社が台風や火災などで被害に遭った場合、再建の寄附を募る勸化、将軍や公家といった貴人が死去した場合に、普請や祭礼を一定期間停止する鳴物停止令など、全国に布達するものを全国触という。次に地域限定の触とは、例えば藩領であれば藩触と呼ぶが、いつ藩の役人が村へ検見に行くかを領内村々に知らせる触、藩主一家の冠婚葬祭に関する触、藩の老老交代を知らせる触など、藩領内限定の触を指す。

さて、[表1] は「記録」に記載のあった触、および触に関する内容を表にまとめたものである。これをみると文化2年（1805）以降、幕末の慶応2年（1866）まで17の触、および触に関する内容が「記録」に記載されていることがわかる。また、全国触・藩触がともに混在し、内容に関しては藩主の家督相続や病氣祈祷、死去に伴う鳴物停止令といった藩主に関わることや琉球人参府・和宮降嫁に関わる税金納入など多岐に渡っている。知内区有文書には天明・寛政・享和・文化・天保・慶応・明治期の「触留帳」が11冊残存している（表2）。それでは[表1]と[表2]を見ながら「触留帳」と「記録」の両方に記載のあ

[表2] 知内区有文書の中の「触留帳」

文書番号	文書名	記載年代	備考
1-2	〔触留帳〕	天明5～8年（1785～1788） 寛政1～11年（1789～1799）	前後欠カ
1-6	御公儀様御地頭様御廻文奉拝見写帳	寛政12年（1800）	
1-7	〔触留帳〕	寛政12年（1800） 享和3年（1803）、文化1年（1804）	前後欠カ
1-8	〔触留帳〕	寛政12年（1800）、享和1年（1801）	前後欠カ
1-10	御公儀様御地頭様御廻文写帳	文化1～6年（1804～1809）	
1-13	御公儀様御地頭様御廻文写帳	文化7～14年（1810～1817）、文政1～2年（1818～1819）、天保12～13年（1841～1842）（天保期は6頁）	
1-25	御触写	天保13年（1842）	御触写と書いているが、内容は御条目
1-31	御触書写永代付留帳	慶応2年（1866）	
1-33	〔触留帳〕	寛政11年（1799）、享和1～3年（1801～1803）	帳外れ／1-2・1-7・1-8と続きカ
1-35	臨時御触写附留帳	慶応2～4年（1866～1868）	
1-40	御触書写	明治3年（1870）	

る触についてみていこう。

知内区有文書 1-10、1-13 の「触留帳」を見ると、[表 1] の 3・7 番の触が「触留帳」にも「記録」にも記載のあった触である。まず [表 1] 3 番の触は文化 5 年（1808）に朝鮮通信使の来聘にあたり、村高 100 石につき金 1 両を 5 年間分割して毎年税金として払うように通達した触である。次に [表 1] 7 番の触は藩主が参勤交代で江戸詰をしていたが、国許に帰ることを幕府から許可されたという内容の触である。[表 1] 7 番の触は実は文化 9 年（1812）の触の内容であるにも関わらず、なぜか「記録」には文化 11 年の箇所に記述されている。この点は次節で述べることにする。ここでもう一つ疑問が生ずる。[表 1] 3・7 番の触のみ「記録」にも「触留帳」にも記載があるのはなぜだろうか。書手が「触留帳」に書き写したことを忘れて「記録」に再び書いてしまったのか、現段階では不明である。

さて、この 2 つの触には共通点がある。それは、「触留帳」に記載されている文字一字一句すべて「記録」に写し取っているという点である。つまり、廻ってきた触の内容を「記録」に丸写ししているということである。この共通点についても次節で検討していくことにする。

このほか、「触留帳」に記載がある内容に関連する事項が「記録」に記されている。それは朝鮮通信使来聘にともなう納税について、知内村の負担金を京都の役所へ持参したという内容である（[表 1] 6 番）。また、知内村をはじめ、郡山藩飛地領の海津手地域を管轄した海津役所⁸⁾の代官が交代になるとときには必ず藩触が廻ってくるのであるが、「記録」にも文化 12 年（1815）代官園崎園平が郡山から海津へ引越する旨の通達があったと記載されている（[表 1] 9 番）。当然、園崎園平が新たに代官として海津役所へ来るということは知内区有文書 1-13「御公儀様御地頭様御廻文写帳」（「触留帳」）に記されている。ただし、この 2 つの「記録」の記述はあくまで「触留帳」に記載がある内容に関することであり、触の写しで

はない。

2) 知内村「記録」に記載された触、記載されなかった触

1) にて「触留帳」と「記録」の両方に記載があった触についてみてきたが、知内区有文書には「触留帳」が 11 冊存在するため、触が知内村に廻ってきた際、「記録」ではなく「触留帳」に記載していた。そのため、「記録」に記載のない触は、すべて「触留帳」に記されていると理解できる。しかし、「記録」に記載があっても「触留帳」には記載のない触がある。それは [表 1] 3・7 番（「触留帳」と「記録」の両方に記載のある触）[表 1] 6・9 番以外の触、すべてである（[表 1] の 10～16 番は時期的に対応する「触留帳」が残存していないため、「記録」と「触留帳」ともに記載があったかは不明）。これはどういうことであろうか。その理由について、いくつか考えられる点がある。それは、①触が知内村に廻ってきたとき、本来であれば「触留帳」に記載しなければいけないはずが、何らかの理由で書き洩らしたため「記録」に記載した。②村にとって重要な触とそうでない触があった。要するに村が「記録」に記載すべき触を取捨選択していた。③当時の書手の性格上の問題。以上 3 点が考えられる。まず①の理由であれば、1) で述べた「触留帳」と「記録」の両方に記載のある触（[表 1] 3・7 番）は一字一句丸写しして「記録」に記載していたと指摘したが、もし当時の書手が「触留帳」に触を書き写すことを忘れて、代わりに「記録」に記載したと想定しよう。そう考えると、触の文言一字一句、「記録」に丸写しているということは、「触留帳」に記載する通りに触の内容を書き写すという行為を「記録」に対してもおこなったと指摘することができる。本来、村に廻ってきた触は書かれている内容をすべて「触留帳」に丸写するため、「記録」に書かれている触は廻ってきた触の文言を修正することなく書き写していると思われる。ここで 1) で述べた [表 1] 7 番の触に立ち

8) 江戸時代の知内村は享保 9 年（1724）から明治 4 年（1871）まで大和国郡山藩（柳澤家）の飛地領であった。郡山藩の領地は、大和国 6 郡、河内国 1 郡、伊勢国 2 郡、近江国 5 郡にまたがる計 15 万石余であり、それぞれ和州河州手・金堂手・海津手・四日市手の地域に分けて支配していた。近江国飛地領は湖西と湖東に分散しており、郡山藩は飛地領役所として高嶋郡・浅井郡（53ヶ村）に海津役所を設置して、支配をおこなっていた。

返ろう。文化9年(1812)藩主が国許に帰ることを幕府から許されたという内容の触であるが、「記録」には文化11年の箇所に記述されている。これも数年経って「触留帳」を見返したかどうかは定かではないが、「触留帳」に記載していないことに気づき、「記録」に記載した可能性がある。

次に②の場合はどうだろう。触で得た情報を村が取捨選択して、あえて「記録」に記載したのかどうか。ここで[表1]をみると藩触・全国触が混じり、郡山藩の家老の交代や税金関連など内容はさまざまであり、共通点は見当たらない。特に村にとって重要であろうと考えられる触は、村が領主に出す金銭に関するものや年貢収納に関わるもの、いわゆる税金に関連する触である。その上で[表1]を見ると、金銭に関する触のみを「記録」に記載しているかというところでもない。しかも知内区有文書の「触留帳」にも、当然ながら村への金銭の割り振りに関する触や年貢収納に関わる検見の知らせ等の触は記載されているのである。以上の点を勘案すると、本来、「触留帳」に書き記すべき触の内容を村側が取捨選択して、村にとって重要であると判断した触を「触留帳」ではなく、あえて「記録」に記したわけではなかった。要するに、村にとって「記録」に再録せねばならない触の情報を取捨選択したわけではないということである。

以上、①何らかの理由で書き洩らしたため「記録」に記載した。②村が「記録」に記載すべき触を取捨選択していた。の二点について検討したが、やはり「触留帳」に書き洩らした触の内容を証拠として残さないといけないため、「記録」に記載したと考えるのが妥当であろう。

ただここで一つ疑問が浮かぶ。それは触を見ながら「触留帳」に書き写すため、なぜ「触留帳」に書き洩らして「記録」に記載できたのかという点である。触を次の村へ廻してしまった後に他村へ行って「触留帳」を見せてもらって書き写したとしても「記録」ではなく「触留帳」に書けばよい。それは可能性として考えられる③書手の性格上の問題で、「触留帳」に書いても「記録」に書いても同じかと判断したのかもしれない。可能性は尽きないが、はっきりした理由は不明である。

3) 小 括

以上、「触留帳」と「記録」両方に記載された触・知内村「記録」に記載された触、記載されなかった触について検討してきた。それらを踏まえて領主から村へ廻ってくる触を通して「記録」とは何か、最後に考えていきたい。「記録」にあつて「触留帳」にない触の記述が存在し、かつ「触留帳」と「記録」両方に記載された触が「触留帳」に記載された文言と全く同じであったことから、近世の知内村「記録」は村で起こる日常の出来事を書き留めるという性格だけではなく、証拠を書き留める「記録」、領主からの触を「触留帳」に書き忘れた際にも証拠書類を記録できる「記録」であったと言えるのではないだろうか。

まだ分析・検討せねばならない点は多くあるが、触を通しての知内村「記録」の性格は上記のように位置付けることができると考える。

3. 「記録」に印を押すということ (高橋大樹)

ここまでの検討で、知内村「記録」について、記主による記述内容の採用(選択)、不採用(非選択)についての分析がなされた。

私たちは「記録」を「村の日記」と捉え、周辺史料(区有文書等)を併せて用い、歴史学・社会学それぞれの立場から、知内村研究の調査実践を進めてきた。ただし、この史料を「日記」と呼ぶにはあまりにも内容が複雑であり、性格付けすることが難しい。そこにはまずそれぞれの史料評価・価値基準の相違が存在する。今後、この「記録」を読み直しながら村研究を進めるにあたり、その史料性格をどのように評価するか、今後のあらゆる分析に資する史料批判をおこなうことが必要である。

しかし、私たちはこれまで「記録」の内容に注目しながらも、その記述方法や編成に目を向けることが少なかったことは真摯に反省しなければなるまい。近年、アーカイブズや史料学の深化とともに、モノとしての史料に注目する研究が進展しており、内容のみならず、1点1点の「記録」をモノとして分析することもまた欠くことができない作業であろう。

本章では、「記録」がどのような史料であるの

かという根本的な問いの前提的考察として、「記録」にみえる押印の問題を取り上げる。それは、文書ではなく記録や日記になぜ押印がなされているのかという史料学全体にも関わる問題でもある。

もちろん、近世中後期から現代まで記録され続けた「記録」について、とりわけ押印のあり方や機能、その意味を一律に論じることとはできない。しかし、それをあえて通時代的に検討することにより「記録」の記述編成や記主の意識、また村運営における「記録」の位置付けの検討につながるだろう。ここに、本稿が課題とする、記録されるもの／されないものに加え、押印するもの（させるもの）／されないものという視点も意識したい。このことは、押印の有無がそのまま原本（正本）／写し（控え）といったこれまでの歴史学や古文書学における分類方法について、いま一度再考を

促すことにもなろう。

1) 「記録」にみえる 15 件の押印

では、「記録」（延享 2 年〔1745〕～昭和 35〔1960〕知内区有文書目録掲載分）にみえる押印について示しておく、〔表 3〕の通り 15 件が確認できる。そのうち時代区分を目安にすると、明治以前は、①天保 4 年（1833）、②嘉永 7 年（1854）の 2 件で、明治以後は 13 件の「記録」（丁間の挿入文書押印も含む）への押印が確認できる。このなかで、大正 8 年以降の 12 件は、会計書類を写し込んだ上での押印（監査印的性格）や訂正印などのほか、記主である戸長・区長の個人的および偶発的に押印されたと判断されるものもある。ここでは、明治 5 年までの 3 件（近世後期 2 件、明治 5 年の割印）を取り上げ、「記録」における記述と編成の視点から分析を加える。

〔表 3〕知内村「記録」における押印一覧

件数	年月日	西暦	事案	押印
1	天保 4 年 5 月	1833	大般若御祈祷之事改	安養寺・海蔵院、組頭 6 人（但し押印は寺院 2 ヶ寺のみ）
2	嘉永 7 年 12 月	1854	御囲米預り覚	庄屋・年寄（2 人）・組頭惣代（2 人）の押印
3	明治 5 年	1872	知内村三ヶ寺檀家数書上	確認印としての割印（戸長印カ）
4	大正 8 年 5 月 9 日	1919	水路抱欄工事収支決算書	区長会計主任・代理者他 7 名（但し印は主任個人印のみ）
5	大正 9 年 10 月 31 日	1920	龕薦堂再建寄附金領収	総代（百瀬村大字知内総代印）
6	大正 9 年 11 月 2 日	1920	龕薦堂再建費決算書	区長・代理者・小便（但し、印は区長個人のみ）
7	昭和 2 年 1 月 27 日	1927	「記録」第七号見返・年度区長としての確認印	区長・代理者（但し、印は区長個人印のみ）
8	昭和 5 年 9 月	1930	国勢調査票（写）六区世帯訂正印	区長もしくは調査員の印か
9	昭和 14 年 3 月	1939	愛国貯金募集合計金額等に関する訂正印	区長印か
10	昭和 14 年 3 月 21 日	1939	代理者職務任期に関する協議員会での議案（写）欄外訂正印	区長印か
11	昭和 21 年 2 月 1 日	1946	協議員・隣保組合合同協議会村入承認保証人印	保証人印（区長個人印 2 ヶ所）
12	昭和 30 年 3 月 2 日	1955	五ヶ字区長会議案（原山売却収支等）貼付割印	知内共栄組合長印・区長個人印
13	昭和 35 年 10 月 25 日	1960	知内川親鮎放流（県費補助）協力と捕獲行為注意依頼文（大字知内隣区長宛）（丁間に挿入の文書）	百瀬漁業共同組合長印
14	昭和 35 年 10 月 26 日	1960	知内婦人会再発足総会通知状（各組合長宛）（丁間に挿入の文書）	区長印および 12 顆の契印
15	昭和 35 年 6 月 20 日	1960	排水溝構築設置通知文控制印	契印 3 顆（送付宛 3 人分）

2) 年中行事の規約書への押印

まず、「記録」における押印の初見である天保4年(1833)の史料についてみてみよう。これは、「大般若御祈禱之事改」との表題ではじまる五穀豊穰・疫病退散など、村の無事を祈願する大般若波羅蜜多經を転読するという年中行事の規約書が写し込まれた部分にあたる。

この史料の内容については、すでに旧稿においてその内容を検討したことがあり、同年に起こった大般若經会に関する村・寺・檀那をめぐる対立と内容の改編について明らかにした⁹⁾。いま、「記録」への押印問題を考えるにあたって、この争論の要点を示しておく、①従来から続いてきた大般若經会の執行において問題が生じ、組頭(長分)の主導による行事内容の再確定が行われ

たこと。②再確定した行事内容(作法も含め)について、寺院(安養寺・海蔵院)・組頭が押印した規約書を「壺巻ツ」、寺院それぞれに渡し保管させたこと。③この争論は20年後に再び問題化し、その取決めに「記録」に見えること、などである。

はたして、この規約書は、寺院側(安養寺・海蔵院)と組頭(長分:村側)の両者間で作成された。ただし、安養寺・海蔵院へは「壺巻ツ」の規約書が送られ¹⁰⁾、村側(組頭)には「壺巻ツ」の形態の規約書でなく「記録」の中に規約書そのものが写し込まれたのである。

そこで問題となるのは、なぜ「記録」に写された規約書に2ヶ寺のみ押印がなされているのかということである。本来、2ヶ寺と村側で互いに内



【図3】知内村「記録」天保4年(1833)部分(上)、押印部分拡大(下)

- 9) 高橋大樹「近世村方祈禱に関する一考察-知内村と大般若經会争論-」『佛教大学大学院紀要・文学研究科編』第39号、2011年。
- 10) ただし、安養寺・海蔵院ともに本規約書を含む近世文書・記録はほとんど残されていない。それは嘉永5年の火災による焼失と考えられる。なお、両寺は互いに隣接し、火災の様子は知内区有文書および知内村「記録」からも窺える。

容を確認した「壺巻ツ、」の規約書は、今後の大般若経会執行の内容を保証・確約させるものとして、両者間で押印がなされたことは間違いないだろう。ただし、村側に残る「記録」内の規約書には組頭（長分）の押印がない。

ここで、もともと3通の「壺巻ツ、」の規約書が作られ、村側の控えとして「記録」に綴じ込まれたのではないかという点が、文書作成過程の問題として想定される。そこで、この規約書が写されている「記録」第1冊目をみると、内容として延享2年（1745）8月～安政4年（1857）12月の記録で構成され、天保4年の当該史料はこの冊子に含まれている。「記録」の形状としては、袋綴装（縦28.2 cm、横20.0 cm、160丁）であり、規約書は87・88丁目にかけ、87丁目表・裏、88丁目表にかけて写されている。この「記録」規約書部分が、安養寺・海蔵院に渡された「壺巻ツ、」の状態の規約書と同様に、もともと1通の文書（続紙）として作成され、それが後日「記録」に綴じ込まれたのでは、とも考えられなくもない。しかし、87丁目までと88丁目以降の料紙（紙の質など）を確認したところ、同一の料紙であると認められた。したがって、この規約書部分は、はじめから冊子状の「記録」に写され、その上で2ヶ寺の押印がなされたものと判断できる。

以上のように、大般若経会争論をめぐる「壺巻ツ、」の規約書作成過程を推定するに、2ヶ寺へ渡された規約書は、村主体で作成されたものであり、村側には控えとして文面が「記録」に写し込まれつつ、後年においても実効力を確認する上で2ヶ寺に押印させたと考えられる。したがって、文書作成主体者である組頭（長分）の押印は、あくまでも本史料が控えであったため必要なかったと判断できよう。ここに、「記録」が参照・調査・継承のために存在したことに加えて¹¹⁾、村の日常生活上（年中行事の運営）で極めて強い実効力を持たせた「保証」機能を内包していた、あるいは近世後期の「記録」にはそうした側面があったと考えることができよう。

3) 「御囲米預覚書」の庄屋印

ここで次にもう1点、「記録」嘉永7年（1854）12月の「御囲米預覚書」をみておこう。これは、村内10石以上の生産力保持者に対し、村の囲米（備荒貯蓄の粉米）を1～2俵ずつ預けた際の記録で、154丁裏・155丁表に記録された史料である。関係する史料が他に見いだせず、この預け米の経緯は不明であるが、この時、全部で23人分24俵の「納米」が分配された。史料作成者は、庄屋・年寄（2人）・組頭惣代（2人）の5人で、それぞれが押印している。また23人の俵数の上に確認印として庄屋印が押印され、冒頭の合計俵数には5人全員の確認印が押されている。

知内区有文書には同様の史料は見いだせず、おそらく「記録」上でのみ作成された文書ということになるか。ここでは、村の囲米が個人へと預けられることの記録であるとともに、算用帳簿としての機能が込められていると判断できよう。ただし、その後、「記録」にみえる安政5年（1858）、万延元年（1860）、文久元年（1861）の「囲米預人別書」には、5人の押印も確認印もない。この嘉永7年の「御囲米預覚書」の押印は、単なる偶発的なものであろうか。おそらく、それ以降において押印は必要ないが、内容は保証されたと考えた方が妥当と思われる。



【図4】知内村「記録」嘉永7年（1854）「御囲米預覚書」

11) 古川彰「生活知のくり出し方：『村の日記』のなかの調査」『先端社会研究』2号、2005年。

4) 檀家数確認の割印

最後に、明治5年(1872)に確認された檀家数(安養寺檀家50軒、海蔵院檀家32軒、光傳寺檀家18軒)がそれぞれ確認され割印がなされた箇所である。これは、戸籍編成に連動した記録で、当該期に村政を主導し、事業家としてピワマスの養魚に尽力した中川源吾の「中川源太夫私有記録」(個人蔵)に、「明治五年壬申、戸籍編成始マル、平民ニ苗字ヲ許ス、宗門自在ノ権ナルヲ以テ村内三ヶ寺ノ内取定メ、戸籍ニ謄記ノ事、村内確定セシハ総戸数百三戸(内寺三戸)、内安養寺五十戸、海蔵院三拾八(二)戸、光伝寺拾八戸ト確定セリ」との記述と対応する。一方で、同じく中川源吾が自身の菩提寺(安養寺)の歴史についてまとめた「寺有記録原稿」(個人蔵)によれば、「明治五年申四月、御一新二付、戸籍改正宗門帳廃止二付、村役場ヨリ半檀徒ノ者ハ、自後(爾)五十年間、旧来之通両寺へ年忌供養等可致旨申渡

相成候事」と、近世知内村において続いていた、家内で男女別に檀那寺が異なる「半檀家」の慣習の継続容認を通達されたとの記録がある¹²⁾。ここに、制度として半檀家の解消と、習俗として半檀家を50年先までは認めるという全くことなる内容が伺え、いま問題としている「記録」における檀家数確認の割印は、寺院経営にもかかわる檀家数を村として保証する側面をもったものとして評価できようか。

したがって、「記録」の中の檀家数の下に記された「規則別印」が何を指すかは具体的には不明

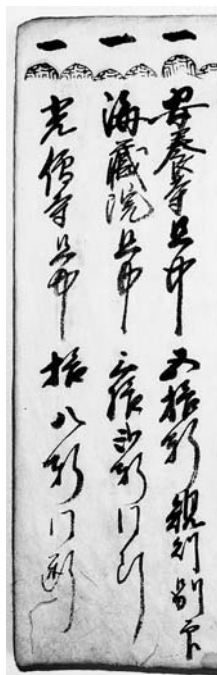
であるが、行政側(郡役所や県)に提出した寺院明細帳などに割印されたものと推測される。ここにおいても、(特に寺院に対する)契約・確認的な内容に対する確認印として機能していることが見て取れよう。

5) 小 括

ここで、先にみた「記録」における押印の初見である天保4年の大般若経会規約書の分析を踏まえると、この「記録」は、村側(組頭・長分・協議員)による記録であり、たとえ村内であったとしても(具体的には寺院・檀家組織など)他集団との協議事項を確定し確認する意味を込めて、押印させ、かつ証拠保全と共に内容の保証を強く行なったものといえるのではないだろうか。

その上で、この押印の問題を「記録」の史料性に引きつけて考えれば、本来、状形式で作成されるべきはずの文書が、区有文書に保管されるのではなく、「記録」に書き込まれることにより、内容が次代へと引き継がれ、かつ「記録」の存在(形態)自体が個別発給の文書内容を保証し機能していたと考えられる。いわば、「記録」の存在そのものが村の発意の集合であり、厳密に問えば、それは外面的には庄屋・戸長・区長の文書収発や備忘録としての記録であり、内面的には村運営を主体的に担っている組頭・協議員の発意と総意の記録であったともいえるだろう。

ただし、近世においては、何を記述し留めておくか、また状形式で授受した文書・記録を共有文書として保管し、「記録」には記述しないものなど、相当に振幅があり揺れ動いていたともいえる。その上で、少なくとも近世中後期の「記録」においては、押印の実例より、単に情報収集され、時に参照・照合される文書・記録ではなく、村内外の関係において保証を伴った極めて実用的な記録として機能していた時代があったということである。それが、明治時代以降にどのような様に変化し、またモノとして変化していったのかという通時代的検討は、改めておこなうべき課題で



〔図5〕知内村「記録」
明治5年(1872)部分

12) 高橋大樹「『寺誌』を識すということー知内村記録の『周辺』ー」鎌谷かおる編『明治・大正期の中川源吾をめぐる史料と地域社会』(科研報告書)「日本近世近代移行期における内水面漁業の研究ー琵琶湖を対象にー」(課題番号 25770247)平成26年~平成28年度科学研究費補助金(若手研究B 研究代表者 鎌谷かおる)研究成果報告書、2016年。

ある。

この押印問題も含め、知内村「記録」の形態論は、当然おこなうべき作業であるが、それはこの2020年段階の「村の日記」まで含めて通時代的に考察する必要がある、その前提として各時代・各冊子の形態、つまりモノへのまなざしが欠かせない。本章での考察は、「記録」を読むという研究・分析において、記述性・史料性の検討するための前段として位置付けられるものである。

おわりに（古川彰）

滋賀県湖西北部の村で書き継がれてきた「記録」（「村の日記」と名付けた）と題された文書からそれぞれが関心のあるテーマを取り上げ、記されなかったことを通して、約270年間も書き継がれてきた「記録」の性格について考えてきた。

記されたことに比べて、当然のことながら記されなかったことは膨大で、それを読み取ることは困難である。ここで試みられていることは、記されたことの内に、記されなかったことの痕跡を見いだすことでしかない。鎌谷は明治近代国家形成期に、それまで大川と呼ばれてきた川が「知内川」という固有名詞で記されるようになることを取り上げて、そして「記録」には「知内川」としか書かれなくなっても、きっと「大川」はその後も日常の暮らしの中では使われ続けていたのではないだろうか、と推定する。であるならば、ときに「大川」が記述の中にでてきてもいいはずなのに、きっぱりと消えてなくなるのはどうしてだろうかと考える。行政の指示を契機としながらも、文書雛型に基づいて地域レベルで統一した書類が作成されていく時期、無意識のうちに「記録」の中でもおそらく抵抗もなくそれが浸透していった。今回は、それを川の事例を通して検討した。今後は、川以外の村の生活空間のあらゆる名称がどのように改変され、それが浸透していくのかということ「記録」から読み解いていくことができるだろう。それにより、「記録」の読み方に広がりが生まれる。

郡山は近世に行政から村に出され「触帳」にファイルされた多くの触のうち、わずか17の触だけが「記録」に写されているのはどうしてだろう

か。また逆に「記録」にあるのに「触帳」にファイルされていない触があるのは一体どうしてだろうかと考える。そして17の触の一つ一つの内容を読み込んで、「記録」に写された理由、「触帳」にファイルされなかった理由を考える。

そして近世期の知内村「記録」は、「村で起こる日常の日記」という「私」的な性格だけではなく、「証拠を書き留める」、「触留帳に書き忘れた際にも証拠書類を記録」するためという「公」的な性格を持っていたと、暫定的に結論を出してみる。つまり公としての「記録」と私としての「日記」が混在しているとみるのだ。文書の公的性格と私的性格から「記録」にアプローチする視点を得ることによって、今後、区有文書に残るすべての行政文書と「記録」との比較検討が可能となる。

高橋は「記録」のなかに15の押印された箇所を見いだし、「記録」が「日記」だとしたらなぜ押印などするのだろうかと問いかけてみる。さらに一つ一つの押印について、その書かれた内容から押印の理由を推測していく。そして、「記録」が村人の日常の私的なものではなく、村のなかの公をになう人びとによって記されたものであり、村のなかの他の集団との約束事は公的な性格をもつことを明らかにする。その上で、「触帳」のような区有文書ではなく、「記録」は次世代に引き継がれ検索されるようなメディアとして記されているのではないかと推測する。そして「記録」が検索可能なメディアであるとすれば、単年度で「冊子」を分ける必要はない。年度を超えて次世代に継承する上で、大部になるまで書き継いでいく「記録」の性格を、形状からも考えられる可能性を展望した。

それぞれの結論は、まだまだ想像の域をでないけれど、私たちの共同研究の原点である「記録」と「村の日記」に引き裂かれたかに見える知内村「記録」の性格を、コンテキストと時間の遠近法とでも言うべき方法でクリティークすることで、その時々公私のあり方によって性格づけられるものであり、公私を村の外と内というだけでなく、村の内部の公私のあり方からも再検討することを要請していることに気づかされる。

それを気づかせてくれたのも「村の日記」研究

会のような共同研究があり、そうした研究会がフィールドでの協働を通して学び続けてきたからだろう。

共同研究の面白みは、専門分野の垣根の向こう側を、最初は垣根越しに、そしていずれは垣根を

越えて味わうところへといき、だからといって簡単には溶け込まないところにあるのだと感じる。

* 本稿執筆にあたり、知内区の方々にお世話になりました。末筆ながら感謝申し上げます。

A Description of the *Village Diary*

ABSTRACT

A document entitled Kiroku, which means record, has been passed down for over 270 years in a village located in Kohoku, Shiga Prefecture. In this paper, we refer to this document as the *Village Diary*. It includes correspondence with public organizations and contains records of everyday events. What has enabled the *Village Diary*, which documents relatively small-scale events, to be preserved? This paper examines the *Village Diary* more closely, in particular, by noting what is not recorded in it.

Evidently, the entirety of what is not written is too much to grasp. Instead, in this paper, through examination of what is written, we detect the traces of what is not written, embedding these identified items in the context of each era, and extracting new meanings.

Key Words: village diary, community owned documents, historical materials survey